

わか草



第66号 令和5年4月1日
発行 東京都立東部療育センター
広報委員会
東京都江東区新砂3-3-25

院長就任のご挨拶

東京都立東部療育センター
院長 椎原 弘章



院長就任の挨拶
令和5年4月3日
当センターにて

皆様、こんにちは。このたび、四月一日付で院長に就任いたしました椎原と申します。まず簡単に自己紹介させていただきます。大学を卒業し大学院を修了後、出身大学、各地の国立病院、市立病院、こども医療センターなどで小児科全般の臨床研修を行いました。一九八六年から新設された大学病院小児科で、一九九八年から都内の公的病院小児科で主に小児神経疾患を中心に広い範囲で診療や研究、教育を行ってまいりました。二〇〇四年に社会福祉法人

全国重症心身障害児(者)を守る会の旗艦施設であるあしかがの森足利病院に赴任し、診療部長、通園センター管理者、院長、所長を経て、重症心身障害、小児神経疾患、神経発達症、てんかんなどの医療や療育、施設運営に携わってまいりました。東部療育センターは都立病院ではありませんが、同じ法人が指定管理を受けている仲間の施設であり、私にとって非常に親しみのある施設です。

当施設は初代院長の有馬先生のリーダーシップのもと、当時の石原都知事の理解・英断と、重症児者を持つ親の方々の親の会である全国重症心身障害児(者)を守る会、関係する自治体職員など多くの方々の熱い情熱と努力によってできた施設です。その後二代目院長の加我先生、三代目院長の岩崎先生、各部署で働く職員の尽力と利用される皆様のご支援、ご協力を得て発展をとげ、現在では東京都東部の重症児者に対して高度な医療・福祉を提供する施設として極めて重要な役割を果たしています。このたび創立十七年を超える伝統ある病院の院長を拝命し、身が引き締まる思いであります。

◆ 職員へ ◆

今後この施設を管理運営させていただくこととなりますが、職員の皆様には三点お願いしたいことがあります。

1. 常に前進を〇現状維持は退化になる世の中はあらゆる分野で日々進歩を続けており、特に医療の分野ではその

動きが顕著です。進歩は保育や療育、介護技術、栄養、事務的処理やICTなどの分野にも及びます。もとより障害児者の状況やご家族の状況も変動しています。医療や福祉を取りまく社会情勢、種々の法律・制度なども年々変化しています。このような環境の中、現状に満足し自分たちの周りの進歩・変化に追い付いていけなければ日々退化していくこととなります。世の中の進歩に追いついていくために、さらに前進させていくために問題点の分析、改善策の検討が重要であり、一歩進んだ研究的配慮も必要です。

2. 職員みんなで行く東部療育センター〇病院運営に全職員の積極的な参加を

病院は極めて多くの職種が関与しており、その運営には幹部職員だけでなく職員の皆様全員の協力が必要です。トップ・ダウンで決めていかなければならないこともあります。医療や療育、生活支援の質を向上させるために、施設の機能をレベルアップさせるために、また職員の皆様により働きやすい職場とするために、ぜひ現場の皆様からの声をお聞かせください。

3. いつも笑顔と挨拶を忘れずに〇仕事は楽しく

センターを利用される患者様や入所者・利用者の皆様、そのご家族の皆様は、毎日の生活に非常なご苦労をされています。明るい笑顔で接しましょう。言葉のない方々にもこちらから話しかけてあげてください。職員同士の間でも笑顔は重要です。毎朝明るい笑顔で

卒業を祝う会

桜咲く三月二十二日に病棟のダイニングにて卒業を祝う会が行われ、墨東特別支援学校小学部一名が卒業しました。今年度も保護者が参加されることが出来ました。卒業証書を校長先生から手渡しされると、その証書をいつもお世話になって東部療育センター職員の方や利用者の方々に披露して、温かく祝福されました。小学部六年間の思い出を胸に、四月からは中学生として充実した毎日を送ってください。(かもめ分教室 千葉)



卒業を祝う会の様子

乳幼児通所卒園式

三月二十八日、令和四年度の乳幼児通所卒園式をプレイルームで行いました。卒園児は四名で、二名の方が自宅からのリモート参加、二名の方が式場での参加となりました。例年であれば、ほれほれと一緒に過ごした園児たちからも直接お祝いの言葉を受けることが出来たのですが、今年もコロナ禍のため卒園児のみの式典となりました。しかし、リモートによる在園児からのメッセージがあり、笑顔を見る事が出来ました。これからは小学生となり、別々の学校に通う利用者様もいますが、ほれほれでの友情や思い出をいつまでも持っていてくれると嬉しいです。そして、さらに成長していつか送ります。本当におめでとうございました。(乳幼児通所)



卒園式での記念撮影

江東区障害者作品展

今年度で四十一回目となる江東区の「障害者作品展」は、三年ぶりに展示会場での開催でした。例年と違うのは、会場が豊洲ビックセンターにて展示となったことです。区内の障害者の方々が制作された絵画・写真・造形・書道・手芸等多くの力作が展示されていきました。そんな中でも東部療育センターから出展したイラストTシャツや絵はカラフルで元気がでるような作品となっていました。利用者様がひとつひとつ丁寧に日中活動の時間を活用して作成した力作です。コロナ感染症対策のために利用者様が参加できなかったことが残念でした。自分たちの作品が展示されている風景や、他の人の作品等も見せてあげたいです。



イラストTシャツ

行事紹介

一月から三月にかけて当センターで行われた行事をご紹介します。東部療育センターでは六名の利用者様(二西病棟一名・三南病棟二名・通所三名)が二十歳を迎えられ、病棟が令和五年一月十八日、通所が一月十一日に成人式を開催しました。コロナ禍のため残念ながら今年も各部署での開催となりました。

成人式

二西病棟ではご家族が準備された紋付袴で正装し、大筆で「成人」と堂々たる文字を自ら書かれ、成人としての決意を感じました。

三南病棟は、こちらもスーツに身を包みネクタイ着用の正装で出席されました。シャランパンでの乾杯の後、「二十歳の誓い」を発表され、頼もしさを感じました。

通所では学校卒業後、通所で共に過ごした三名が二十歳を迎えられました。それぞれの成人の誓いや周囲の人たちへの感謝の気持ち等を発表され、心があたたくくなりました。いずれの式典も、厳かな中にもアットホームな素晴らし



3南病棟



2西病棟



通所

活動紹介

各病棟・通所での日中活動の様子をご紹介します。

2階西病棟



この日の活動は「スノーズレン」でした。スノーズレンとは「ゆったりとする、リラッククスする」という意味があります。照明を薄暗くしてプラネタリウムのライトで視覚的にリラッククス、その後、今が旬の苺の香りのアロマでさらにリラッククスしました。こんな時間大事ですね。参加された利用者さんはうっとりとした見心地の様子でした。

(二階西病棟)

2階南病棟

三月下旬、ペランダの桜も満開の時期を迎えました。そしてこの日はほかほか陽気でした。絶好のチャンスとペランダに出て桜の花見をしました。外の空気に触れ、春の太陽の熱を肌で感じ、思いっきり春を満喫してとても気持ちよかったです。

ペランダでは本物の花以外に、木々の中に予め隠された手作りの花を探するという体験もしました。その後、病棟の中で音の出る花を探して回りました。発見する喜びと、その花の発するきれいな音にまた心癒されました。

(二階南病棟)



3階西病棟



この日は、雨で少し肌寒い日でした。そんなお天気を吹き飛ばせとばかりに「カラオケ」を楽しみました。お部屋は少し薄暗くして、色とりどりのカラーライトで雰囲気はパッチリ！

演歌でしみみりしたかと思うと、アップテンポのピンクレディ、はたまた懐かしい昭和の大ヒット曲でうっとりなどなど、音楽に合わせて歌うとともに、リズムにのって全身で音楽を楽しみました。今回は、感染対策として少人数でしたが、早く皆でカラオケ大会ができるようになることを祈ります。

(三階西病棟)

3階南病棟

ほかほか陽気だったので、絶好の散歩日和と、院内散歩に出かけました。まずは屋外療育場でお花見です。秋には大きな実をつけていた花梨や夏みかんの木も、沢山の新芽を付けていました。療育場の中には「カラスノエンドウ」が一面に生い茂り、かわいい紫の花を沢山つけていました。最後は屋上のテラスに行き、近隣の緑や道路沿いの桜の花を上から見るのが来ました。

(三階南病棟)



通所

成人通所ではモルツクを楽しみました。モルツクとはフィンランドの伝統的なゲームでモルツクという木の棒を投げて一十二までのスキットルという棒を倒します。写真の十一のスキットルを倒すのはなかなか至難の業なんです。(通所)



11のスキットルが難しい

乳幼児通所では、春分の豆まきをしました。赤鬼が登場ですが、やさしい赤鬼なので悪を追い払って、福を呼んでくれると思います。今年こそはコロナ感染症が終息し、もっと外出もできるようにとお願いして豆まきをしました。

(乳幼児通所)



やさしい赤鬼と

令和五年度 事業方針

東部療育センターは、平成十七年の開設以来、「全国重症心身障害児(者)を守る会」が東京都の指定管理者として運営を行っています。

今年度も引き続き、守る会の「最も弱いものをひとりももれなく守る」という基本理念のもと、手厚い医療・看護と介護が必要な都内の超(準超)重症児者を積極的に受け入れるとともに、区東部

療育の支援や地域の関係機関等との連携・支援を行います。

事業の運営にあたっては次の五点を重点事項として取り組みます。

(事務長 松浦)

令和四年度 福祉サービス 第三者評価 結果概要

サービスの内容、組織のマネジメント力等の評価を行い、その結果を公表する福祉サービス第三者評価ですが、今年度は、「株式会社日本生活介護」に依頼して行いました。

評価方法は、定められた評価基準と手順を基に行われ、場面観察やアンケート結果も反映されています。ご家族の皆様にはアンケートへのご協力ありがとうございました。

「入所・通所共通」
①超重症・準超重症児(者)が自分らしく生活を営むため、多職種が連携して支援にあたり、中々でも、積極的に後継者の育成に取り組み、施設をあげて専門性を生かした社会貢献という使命を果たしている

「入所」
②利用者・家族の高齢化を受け、親亡きあとの生活について意思確認を進めており、さらなる進展に期待したい

令和五年三月三十一日、岩崎先生が院長を退任されました。開設準備室から十七年間、東部療育センターの先頭に立って支えてくださいました。ありがとうございました。

院長(退任)

令和五年三月三十一日、岩崎先生が院長を退任されました。開設準備室から十七年間、東部療育センターの先頭に立って支えてくださいました。ありがとうございました。



岩崎先生感謝状授与式にて

採用情報

令和五年四月一日付の新規採用および異動者は、医師一名(院長)、歯科医師一名、栄養士一名、言語聴覚士一名、心理指導員一名、看護師十二名、保育士一名、介護福祉士一名、事務職四名です。今後様々な形で皆様に関わってまいりますので、よろしくお願いいたします。

(広報委員会事務局)

療育部研修



療育部では十二月二十二日に看護研究発表会、一月三十日に卒業二年目職員の新事例発表、そして三月七日に今年度就職した職員の新事例発表会を行いました。発表する側も、聞く側も日頃実施しているケアを振り返る良い機会となりました。



岩崎先生感謝状授与式にて

院内研究報告会も、今年度で十五回目となりました。
ここ二年、新型コロナウイルス感染症の影響で、オンライン配信で行ってききましたが、今年度は引き続き感染拡大防止に留意しながら、会場での聴講も再開し、オンラインと併用して行いました。
今年度は、研究報告六題、業務改善三題の計十題のエントリーがありました。

第一部は、療育部職員による研究報告。当センターが取り組まなければならない課題についての研究が発表されました。

第二部は、診療部からの研究報告と各部署からの業務改善報告。多施設のデータに基づいての比較研究や、有馬症候群についての発表がありました。業務改善報告では、映像が入っている発表もあり、わかりやすく、今後の業務に役立つ内容でした。質疑応答も積極的に行っていました。

審査は抄録、発表資料、発表内容、質疑応答をポイントとして、審査委員により総合的に評価を行いましたので、ご報告いたします。

今後、更に磨きをかけて、全国的な学会で皆様に報告、発信していくことを期待しています。
(庶務係)

【最優秀賞】
「重症心身障害児(者)施設におけるP.O.S.I.の薬剤耐性に影響を及ぼす要因の検討…多施設比較研究」
薬劑室 佐藤 直行さんほか



最優秀賞を受賞した佐藤さん発表の様子

【優秀賞】
「腹臥位台への移動を安全に実施するための検討」
二階南病棟 岸野 亜矢子さんほか

【敢闘賞】
「食事介助における職員の対応の意識変化にフォーカスをあてて」
三階西病棟 熊田優香さんほか

「当院におけるJoubert症候群関連疾患十二例の検討」
医局 吉田 恵美さん



受賞された皆さんと岩崎院長と

お知らせ 地域療育支援室からのお知らせ

今年度は地域療育支援室からのお知らせを掲載していきます。
今回は、センター一階総合受付の左側の壁に、春夏秋冬、季節の訪れを楽しめる装飾をして皆様をお出迎えしている、壁面装飾ボランティアについてご紹介いたします。

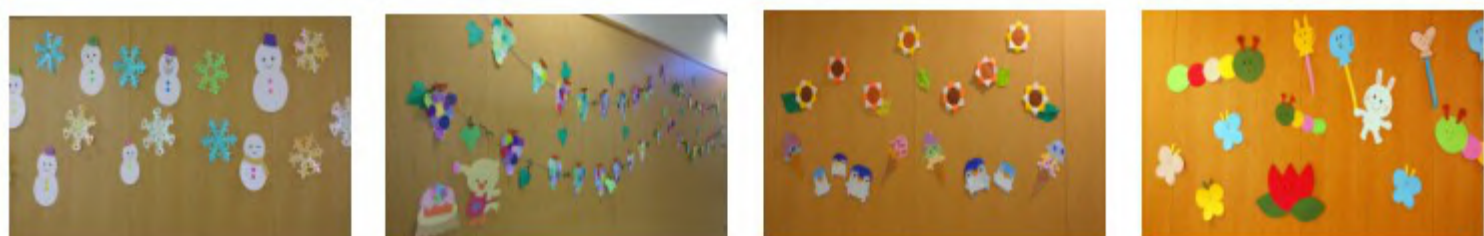
壁面装飾は、各部署のボランティア委員→壁面装飾ボランティア→地域療育支援室とバトンをつないで完成しています。まず、各部署のボランティア委員が季節に合わせた装飾を考え、見本と壁に飾るイメージ図を作成します。春(三〜五月)

を代表する桜や蝶々、夏(六〜八月)はヒマワリや涼しげな印象を与えるアイス、秋(九〜十一月)の味覚であるフルーツや鮮やかな紅葉、冬(十二〜二月)といえば雪だるまや雪の結晶など、四季折々を彩る飾りを画用紙や折り紙等の様々な素材を用いて作成していきます。

見本と材料を登録されている三名のボランティアの方々に渡しし、ご自宅で壁一面に飾るためわいくアレンジしていただいております。そして、後には地域療育支援室のスタッフでイメージ図をもとに飾っています。

センターに足を運ばれた際は、どんなものが飾られているのか注目していただくと嬉しいですよ。(貼り替えのため掲示していない期間もあります) 今後ともボランティアの皆様のご協力をいただきながら、ご来院された皆様が季節の移り変わりを楽しく感じるような壁面装飾を作っていきます。 ※下記の写真は過去二年間の壁面装飾です。

(地域療育支援室 中石)



春

夏

秋

冬

リハ科

連載コーナー

今年度も昨年度に引き続き、リハビリテーション科(心理指導員含む)が連載記事を担当します。今回は、今年成人式を迎えられた利用者様についてセンターでの取り組みなどを交え振り返りをご紹介します。

一月、成人通所で成人式が行われました。成人者のうち二名は地域療育支援室とリハビリテーション科で実施していた乳幼児通園「ぼかぼか」の前身「ぼかぼか」グループに所属していた方でした。

「ぼかぼか」は十七年前の二〇〇六年四月に始まり、毎週水曜日に開催していました。十人前後のグループで、プール・遊具遊び・音楽活動・運動会等を行いました。当時は、医療ケアが必要なお子さんが通える施設がほとんどありませんでした。そのため、ご家族同士の交流も主眼に置き、お子さんの特徴や特性に

合わせながら、家庭でできる遊びだけでなく、家庭ではできない遊びを経験・体験できるように企画をしていました。計画に際しては、お子さんがどうすれば能動的に活動参加ができるのか試行錯誤ばかりでした。

「ぼかぼか」出身のご家族が協力しあって、就学後もセンターのプールを一緒に利用するなど、「ぼかぼか」での活動が実ったと嬉しく思いました。成人式では成長した姿を見ることができて、嬉しかったです。懐かしくもあり、素敵な時間となりました。みんなで入ったプール楽しかったですね。成人通所でも沢山の方々と素敵な時間を過ごしてください。私たちが障害のある方、そのご家族の毎日を少しでも豊かにできるように支援を継続していきます。

(地域療育支援室 西山)

写真につきましては、全て掲載の許可をいただいております。



「ぼかぼか」でプール活動中のおふたり
写真(右)伊野 秀美さん
(左)古畑 凌佑さん

成人式でのおふたり

東部あれこれ

冬から早春のセンターの動きです。

新型コロナウイルスの感染者数は年末から年始にかけて大幅に増加しましたが、一月中旬から三月末にかけて減少しています。新型コロナウイルスは五月八日からは五類感染症に移行することになり、三月十三日からはマスクの着用が個人の判断に委ねられました。(当センターでは、重症化リスクの高い利用者様への感染を防ぐため、引き続きマスクの着用をお願いしています。)

【二月】
十七日から武蔵野大学の看護実習生を受け入れました。
一日から共立女子大学の保育実習生を受け入れ、二十日からは東洋大学の保育実習生を受け入れました。

【三月】
東京では、桜が十四日に開花し(史上二位タイの早さ)、二十二日には満開に(五年連続全国トップ)になりました。
一日にはセンター全体で火災を想定した総合防災訓練を実施しました。

(事務長 松浦)

編集後記

【二月】
晴天で穏やかな年明けとなりました。元旦にはおせち料理をいただき、新しい年の始まりをみんなでお祝いしました。成人式を行いました。

十一日に通所のお三方、十八日に二西病棟のお一方と三南病棟のお二方の、大人への晴れやかな門出をお祝いしました。おめでとうございます。

今回のわか草は、有馬先生の特集を組ませていただきました。記事にご協力いただきました関係者の皆様にもこの場をお借りして御礼申し上げます。わか草第一号では、有馬先生の巻頭言で「これから、定期的に発行されるこの広報誌が、そこに働く仲間集いの場として徐々に伝えられるように期待しています」と書かれています。わか草を通して、次々に伝えられる内容を発信できればと思っております。ご意見等ございましたらご連絡いただけますと幸いです。

←これまでのわか草をご覧になりたい方はこちらからどうぞ



特集 有馬正高先生追悼

初代東京都立東部療育センター院長で、名誉院長でありました有馬正高先生（九十三歳）が令和四年十二月十二日に逝去されました。

有馬先生は、小児神経学、障害児医学の第一人者として知られ、日本の障害児医療や福祉に多大な貢献をされました。

昭和四十六年には、乳幼児に発症する常染色体劣性遺伝性疾患「有馬症候群」を報告。
東京都立東部療育センター設立の前から準備室長として、現在の東京都立東部療育センターの基礎の基礎を作り上げていただきました。
当センター職員一同、生前のご厚誼を深謝し、謹んでご冥福をお祈りいたします。また、関係各位の皆様には心より御礼申し上げます。



開設5周年記念講演会にて
ホテルイースト21（江東区）
平成22年12月1日

追悼メッセージ 「有馬正高先生を偲んで」

岩崎 裕治
東部療育センター前院長

令和四年十二月十二日、有馬正高先生が逝去されました。享年九十三歳でした。心より哀悼の意を表します。

有馬正高先生は、都立東部療育センター開設準備室の時からその室長として開設に向け、施設の理念、事業計画の確立、建物の設計や機材の整備、職員の確保など、都の担当や準備室のメンバーとともに準備を進めてこられました。開設時には初代院長となられ、平成二十六年三月に退職されるまで、約八年にわたり当センターの舵取りをされ、平成二十六年に退職された後は名誉院長として、我々の精神的な支えとなってくださいました。

先生は日本の小児神経学、障害児医療のパイオニアの一人で、その始まりは東京大学小児科でのいれん外来であったと伺いました。その後、東邦大学小児科助教授、鳥取大学脳神経小児科教授を歴任され、国立精神・神経医療研究センター神経研究所二部の部長（小児神経科部長を兼任）に就任されたのが昭和五十三年です。その後同センター国府台病院長、続いて武蔵病院院長、平成六年には都立東大和療育センター院長となられました。各大学や、国立精神・神経医療研究センターでは多くの患者の診療にあたられ、研究業績も数え切れません。また、多くの医師を育てられ、その医師達が現在小児神経学、障害児医療などの分野でそれぞれ活躍されていることも、先生の大きな功績だと言えます。また数々

【略歴】

- ▼昭和四年 鹿児島県出身
- ▼昭和二十八年 東京大学医学部医学科卒業
- ▼その後、東京大学講師、東邦大学助教授、鳥取大学教授
- ▼昭和四十三年には東京都立府中療育センター小児科医長（非常勤）として設立準備にも携わる
- ▼昭和五十三年 国立武蔵療養所神経センター 研究部長
- ▼昭和六十一年 国立精神・神経センター 武蔵病院副院長
- ▼平成二年 国立精神・神経センター 国府台病院院長
- ▼平成四年 国立精神・神経センター 武蔵病院院長
- ▼（平成六年定年退職後、名誉院長）
- ▼平成六年四月 九月 社会福祉法人鶴風会東京小児療育病院・みどり愛育園総施設長
- ▼平成六年十月 東京都立東大和療育センター院長
- ▼平成十四年十一月 勲三等瑞宝章受賞
- ▼平成十六年四月 東京都立東部療育センター 開設準備室長
- ▼平成十七年十二月 東京都立東部療育センター 開設 初代院長
- ▼（平成二十六年）退職後、名誉院長

【主な公職歴・学会役歴】

- ▼昭和三十九年～平成六年 日本神経学会評議員
- ▼昭和四十三年～昭和四十八年、昭和五十一年～昭和五十三年 日本小児科学会評議員
- ▼昭和四十九年 第十六回 日本小児神経学会学術集會会長
- ▼昭和五十七年 国際小児神経学会会員
- ▼昭和五十八年 日本人類遺伝学会評議員
- ▼昭和五十九年 日本発達障害学会理事
- ▼昭和六十三年～平成六年 日本先天異常学会理事
- ▼平成三年～平成十八年 日本発達障害学会第四代会長
- ▼平成三年～平成三十年 日本重症心身障害学会理事長
- ▼平成四年～平成八年 国際知的障害研究協会副会長
- ▼平成五年～平成八年 日本微量元素学会理事
- ▼平成六年～平成二十六年 社会福祉法人全国重症心身障害児（者）を守る会副会長
- ▼平成七年 社団法人 日本知的障害福祉連盟会長
- ▼アジア精神遅滞連盟副会長
- ▼平成二十六年～平成三十年 社会福祉法人全国重症心身障害児（者）を守る会理事長
- ▼平成三十年 日本重症心身障害学会名誉理事長 他多数

「有馬正高名誉院長の 利用者と家族への限らない思い」

唯木 暁
東部療育センター初代事務局長

私は有馬名誉院長のもとで平成十六年四月から東部療育センターの開設準備・運営の業務に三年間従事しました。短期間でしたが仕事においては勿論のこと、人間として多くのことを有馬名誉院長から学ばせてもらいました。それは四十年余りの私の職歴の中で人生の中で最も充実したものでした。日常の事務的業務の遂行にあたっては、有馬名誉院長からは、業務規定の内容等十分理解、納得できるまで説明を求められるなど知識欲旺盛な方でした。そして院長としての統括業務遂行にあたってのゆるぎない確固とした厳しさとは裏腹にあらゆるスタッフの人たちをわけへだてすることなく人間的に非常に暖かかった。

有馬名誉院長が作成した当院の運営理念は、利用者と家族の立場に立った生命倫理の基本であるインフォームド・コンセント、そしてノーマライゼーション、地域の療育支援であった。そして、有馬名誉院長はその理念を確実に実行し、実現されて来られたと思っている。それは、開所後一年となる平成十八年の十月二十三日の朝日新聞「天声人語」に東部療育センターを紹介している。同紙は当院が超重症児を積極的受け入れると宣言し、実際に「超重症児で十六歳のNくんが、体は動かないが確実に、知的に成長、言葉がすこしずつ増え、病室から出たいときは「出して」と言い、他の入所者と一緒に遊ぶ。有馬名誉院長も「命を守るだけでなく

【著書】

『小児神経学』『知的障害のことがよくわかる本』『発達障害医学の進歩』 他多数

【写真で振り返る有馬先生】



守る会創立50周年記念大会にて
グランドプリンスホテル
新高輪・国際館パミール（品川区）
平成26年6月8～9日



開設10周年記念式にて
ホテルイースト21（江東区）
平成27年12月1日

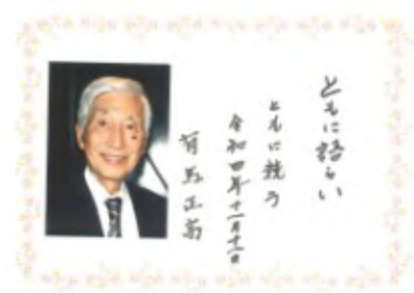


第44回日本重症心身障害学会
学術集會にて
タワーホール船堀（江戸川区）
平成30年9月28～29日



開設一周年記念パーティーでの
有馬先生と唯木初代事務局長

生きていて良かったと思えるようにしてあげたい」と話している。
平成十八年十二月一日付けの当院の「わか草」創刊号は、利用者の生活面ではにぎやかで楽しい朝食、お風呂、訪問学級、療育活動など多くの刺激と笑い声につつまれていくとし、更に個別性を重視した、楽しく豊かな生活を目標としていることが紹介されている。短期間でこのようなことが実現できたことは、医療、療育活動等に取り組み核となる卓越した人材が集結し有馬名誉院長の方針を十分理解、指導のもとに取り組まれた結果であったと思う。最近の当院のホームページでも利用者や笑顔がしっかりと紹介されている。有馬名誉院長の利用者と家族に対する「命を守るだけでなく生きていて良かったと思えるようにしてあげたい」との願いがいつまでも引き継がれ、更により発展することを祈念して追悼の辞としたい。



有馬先生からいただいた
メッセージ

「有馬正高院長先生を偲んで」

東部療育センター初代療育部長 冠木 義子

看護人生を振り返った時に、このほかに印象深く脳裏に蘇る方々がいます。有馬正高先生もそのお一人。有馬先生と共に仕事をさせていただいたのは、私の看護人生の中でも終盤に差し掛かった頃でした。

東大和療育センターの院長でいらした頃、大先輩が築かれた後任を担う形で一緒に働かせていただく機会に恵まれました。看護とは一線を画す「療育」という仕事に触れ戸惑う事も少なくはありませんでした。その都度的確なアドバイスやご指摘を頂き「療育」という分野への理解を深めさせていただきました。有馬先生は決して押しつけがましいことは仰らず、いつも訥々と柔らかい言葉を語り、けれど時に厳しい目で様々な考え方を話しくださいました。頭ごなしに指示をするのではなく、私たちが自分で考え行動する指針をいつもお示し下さる。在任中はその様な指導をいただいております。

その後、東部療育センターが開設される運びとなった時、当時辞職を考えていた私に準備室への転職の打診をいただきました。



開所式で都知事を案内する有馬先生と冠木初代療育部長

「有馬正高先生を偲ぶ」

東部療育センター名誉院長 加我 牧子

二〇二二年十二月十一日当センター名誉院長 有馬正高先生がご逝去になりました。先生は昭和二十年四月海軍兵学校予科に入学、四か月半で終戦、敗戦後の日本の大混乱の中で小児科医となりました。先生は、生涯その真摯な姿勢を保ち、日本の小児神経学の夜明けの時代にその基礎を築かれ、六十五年以上にわたりトップリーダーとしてこの領域を創り上げ、現在の進歩発展に貢献なさいました。ご自身、三〇〇〇病や有馬症候群などの患者さんへの御貢献はじめ、国内外で大きな業績をあげ、臨床、研究はもちろんです。多数の医学生、医師の教育に献身なさいました。特記すべきは、子どもたちの病気にとどまらず、早くから生活や教育に関わる「障害」の側面に目を向け、知的障害、脳性麻痺、重症心身障害などの全人的医療の進歩発展に多大なご貢献をなさったことです。

背景には一九六八年、都立府中療育センター開設時、併任医長として活躍され、入所後、間もなく亡くなる子どもたちが二割にも及ぶ事態に驚愕された事実があり、二〇〇四年都立東部療育センター開設準備室長となり、最重度のお子さん、子どもだった大人を受け入れるにあたり、二〇〇五年開設時には院長として各病棟に二二名のセントラルモニターを設置し、多数の人工呼吸器、SpO2モニターを用意され、病棟担当者の教育に尽力されたのも府中での経験が始まると思像されます。日本では最重度の重複障害の方々の

「自分には荷が重すぎる」と何度か

辞退申し上げましたが、東部療育センターの院長を有馬先生がお引き受けになった事を知り、先生から多くを学ばせていただいた療育に於ける看護の役割と実践・統制のあり方を活かし先生のお役に立てるならとお引き受けいたしました。

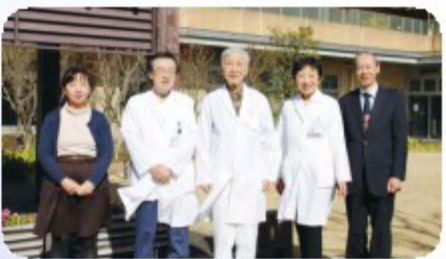
開設準備室時代は、よりよい療育展開を目指した試練の時でした。東京都・先生方・事務方・施設構成に必要な部門の方々の壮絶な切磋琢磨のもと、東部療育センターは誕生し、よりよき歩みからも歩き始めました。そこで私が一番印象深く覚えているのは、有馬先生の院長回診です。現状の把握と療育の質の向上を目的に、週一回の定期院長回診を提案させていただき、院長・事務長・療育部長の三者回診が開始されました。

重度障害を持つ入所者様の多い病棟での有馬先生は、自ら膝を床につき、一人一人の入所者様の手を取り、目で診て耳を傾ける姿勢で私たちに深い学びを与えてくださいました。私も看護師を引退してから早十五年の年月が経ちましたが、有馬先生のお姿は今でも目に焼き付いて離れません。また今の私の支えにもなっています。訃報を伺った昨年十二月、また一人の素晴らしい師を喪った寂しさ。今尚有馬先生の志を受け継ぐ東部療育センターの皆様方に思いをはせずにはいられません。

有馬先生には衷心よりお悔み申し上げますと共に、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

「有馬正高先生との思い出」

開設準備室担当課長(当時) 水野 眞



小児神経学から障害児医学への64年をインタビューした本「有馬正高ものがたり」制作時の有馬先生と水野三代目事務長(右)

有馬正高先生と初めてお会いしたのは、平成二年の夏頃、私が東大和療育センターの開設準備担当をしていた時でした。守る会の北浦雅子会長と有馬先生(当時国立国府台病院院長)をご案内し、建設場所の見学と施設の概要を説明させていただきました。私はまだ重症児や障害児施設のことについての知識はあまり有りませんでした。有馬先生は重症児施策の現状や今後の課題などについて親切に教えてくださいました。この時の先生のお話はその後仕事の大きな糧となりました。それから十数年経った平成十六年、私は東部療育センターの開設準備担当で、再び有馬先生と一緒に仕事をすることになりました。限られた予算の中で有馬先生のご意見を伺いながら細かい設計を進めていきました。この時、障害児(者)の安心・安全を第一に考える先生の理念を学ばせていただきました。

「有馬先生を偲んで」

全国重症心身障害児(者)を守る会 社会福祉法人 理事長 倉田 清子

有馬正高先生の訃報に接したとき、私は心の中に大きな穴が開いたような深い悲しみに陥りました。私が社会福祉法人全国重症心身障害児(者)を守る会の理事長として今の重責に就いていられるのは、全て有馬先生のおかげです。「先生の弟子であられる多くの諸先生方がいらっしゃる中で、私のような微力なものが先生の後任は務められませんか」と強く固辞した私を、現在の所まで引き上げて下さった先生に感謝をお返ししなければと、ずっと思っておりました。

お身体をこわされたと伺っており、近くお見舞いに伺いたいと思っておりました。しかし果たせぬままに、先生は身まかれてしまい、慥たる思いがしております。有馬先生の業績についてはどなたもご存じのように、学者として、医師として、そして何よりも人として素晴らしい方でした。追悼の言葉としてよけいなことを申し上げることはないと思いつつも、個人的にお世話になったことを少しだけ述べさせていただきます。私は平成十九年から約十年間、東京都立東大和療育センターに院長として勤めましたが、そのきっかけをくださったのも有馬先生でした。当時、東京都立府中療育センター副院長であった私を、先生は東京都立東大和療育センター院長にご推薦くださり、拜命すること



第44回日本重症心身障害者学会 学術集会にて タワーホール船堀(江戸川区) 平成30年9月28~29日

合掌

そして平成二十五年、私が東京都を退職し東部療育センターの事務長に就任したとき、三たび有馬先生と仕事を一緒にしました。ここで私が一番印象に残っていることは、毎週一回行われる院長回診において、先生は入所されている一人一人に声掛けをし、身体に触れ、体調を確認しながら、また、職員の様子や医療状況、そして施設の安全面などにも気を配りながら全館を歩いて回られる姿でした。そこに、入所者・利用者への深い愛情と、職員への気遣い、施設管理者としての責任の強さを強く感じました。その後、有馬院長が平成二十六年三月にご退職になりましたが、退職される少し前に、北浦会長から、「守る会五〇周年記念式典を済ませたら、有馬先生を会長職にしたい。」と話があり、私は、一も二もなく賛同しました。理事長になられてからも、先生の障害児(者)への深い愛情と職員・スタッフへの気遣いを大切にされる姿勢は変わりませんでした。

最後に、「有馬正高ものがたり」のインタビューをさせていただきましたが、先生はすべての事柄に丁寧に細かく語ってくださいました。それまで知らなかった先生の人生の一端をうかがうことができ、とても意義深い思い出となりました。有馬先生、本当にありがとうございました。

となった経緯があります。こうした私の人生のいくつかの岐路で、方向を決めてくださったのが有馬先生であり、まさに人生の恩人でありました。ある時、都庁で会議があり、その帰り道、先生は別の方向へ行こうとされました。「先生、地下鉄はこちらですよ。」私はそう申し上げて、一緒に歩きました。意外にも、先生は結構な方向音痴であったのです。先生のそうした一面に接し、僥倖ながら身近に感じ、思わず笑みがこぼれてしまいました。巨星落つ。私にとって、そして多くの人々にとって有馬先生はまさしく巨星の存在でした。有馬先生、あの優しいほほえみで守る会の将来を、そして私どもをいつまでも見守っていて下さい。ありがとうございます。